

『坊っちゃん』における〈名〉

—そのアレゴリー的世界—

好 川 佐 苗

一、はじめに

『坊っちゃん』(明治三九年四月)は、その勸善懲惡的構図のわかりやすさと、主人公「おれ」の巻き起こす様々な事件に生起するユーモアによって、漱石の作品中最も広く愛読されている小説の一つである。しかし、前期漱石文学を代表するこの小説が、その人気にもかかわらず、奇妙に我々を拒むような、ある異質な感じを与えずにはおかないのもまた事実である。例えば、「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」(一)という有名な冒頭句から語り起こされる、「おれ」の幼少期の出来事。彼は「学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある」が、それには「別段深い理由」はなく、「二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と嘲したから」だという。それで父親に「二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるか」と叱られるや、「此次は抜かさずに飛んで見せますと答へ」(一)るといふ、この全く後先を考えない

『坊っちゃん』における〈名〉

「無鉄砲」さは、読者におかしみを感じさせるとともに、どうやら我々とは異なる行動原理⁽¹⁾をもって生きるこの人物への違和を感じさせずにはいない。さらに、続く西洋ナイフの一件では、「何でも切つて見せる」という自らの言葉の真実性を実証するため、「何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはずに切り込」む(一)といういささか常軌を逸した行動に出ており、考えようによっては、単なる違和感には留まらない、ある種の畏怖すら感じさせる行為である。無論それは、「勇気がある」とかいうレベルの問題ではない。自身の身体を傷つけることを何とも思わないこの身体/生命観は、近代においてそれが最も尊重すべきものとして捉えられ、かつ規律訓練、管理の対象として利用されている状況からすれば、まさに驚くべきものである。

また、もう一つ我々の「おれ」への共感を阻むものとして、作品の随所に登場する彼の差別的言辭がある。四国へ到着したばかりの「おれ」は、赤禰の船頭を見ては「野蛮な所だ」と断定し、土地の

人々を「氣の利かぬ田舎もの」として蔑む(二)。その問答無用の田舎(者)蔑視は、当時の根生いの東京人Ⅱ江戸っ子の共感を得るもの、喝采の対象となったのであろうが、現代の我々にとっては、無条件に肯定できる性質のものではなく、近年「近代的な都会人の郷土ナショナリズムの現れ」²、あるいは「植民地主義的侵略者の論理」³として批判の対象となっている。確かに、江戸／東京の優位性を絶対化し、「文明」の側から田舎を「野蛮」と決めつける心性は、近代的価値観を内面化しているとも受け取れる。自身を「江戸っ子」と自己規定しながらも、その実質は帝都・東京にまみれている——それが「おれ」の真の姿であるのだろうか。

しかし、そういった読みが、ただちに読者に違和感を与えずにはおかないのもまた事実である。というのも、そういう「おれ」自身が逆にその田舎の人々から始終笑われ、軽侮の対象となっているからである。事実、作中の「おれ」は、赤シャツはおろか、軽蔑する宿の下女にまで笑われており、浅野洋⁴によれば、作品全体で計二三回も笑われているという。通常、差別とは、政治的／社会的／文化的に優位な者が、劣位にあるものをその位置に固定し続ける行為としてなされるものであるが、この小説において、「おれ」の優位はどこにも担保されていない。何しろ、生徒たちにまで「天麩羅先生」⁵「赤手拭」(三)などとあだ名をつけられて笑われているのであり、「おれ」の差別は、現実的には何の力も持ち得ないものなのである。むしろ我々がここから読み取るべきなのは、こうした田舎蔑視が、

「おれ」の異質性を際立たせ、他の人々から疎外される要因として機能しているということであろう。宿屋に着いた「おれ」は「門口へ立ったなり中学校を教える」と言い放ち、さらに目的地が遠いと聞くやいなや「革鞆を二つ引きたくつて」挨拶もせずに出る。「宿屋のものは変な顔をして居た」(二)というが、至極当然のことである。生徒に対しても同様の態度をとる「おれ」は、この四国の地で、山嵐・うらなりなどの少数の例外を除く、ほとんどの人々Ⅱ共同体から笑われ、徹底的に疎外⁶される異人⁷なのである。

こうした「おれ」の異質性は、しばしば「貴種」として指摘されているところでもあり、そのように考えれば、この小説は四国という島に流された貴種が様々な苦難を強いられる物語Ⅱ貴種流離譚⁸として、神話的な相貌をさえ帯びるだろう。事実、その、「おれ」の貴種性は、「是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ。」(四)というように「元は」武士という血脈を遡行することによって語られている。こうした「おれ」の異質性、貴種性の強調は、「おれ」を實在の人間ではなく、寓意的人物として表象するのに十分な効果を持っているといえよう。それはつまり、読者がこの作品を〈アレゴリー〉として読むことを要請するということにはかならない。事実、この作品は、例えば佐幕派士族と明治新政府との対立⁹として、あるいは金平浄瑠璃などに語られる「源氏」ないしは「武士」の精神を背後にもつ一連の神話¹⁰として、さらには「国民国家」日本のアレ

ゴリー^⑧」としても読まれているのである。何よりも、一つのストーリーが、「それ自体とは別の意味や観念を表すものとして配置され^⑨」ていることを特質とするこの物語。そのアレゴリー性は、どのような記号の配置によって可能となり、我々に何を開示するのだろうか。

二、固有名とアレゴリー

そこで浮上してくるのは、この作品において固有名が徹底的に拒否されているという問題である。作者の伝記的事実を考慮せずとも、作品の随所に出てくる方言によって、作品の舞台が松山であるといふことはほぼ特定できるが、しかし作品内の記述としては「四国辺」とあるだけで、実は松山とは書かれていない。さらに、登場人物にしても、堀田、古賀、吉川、遠山というれっきとした固有名があるにもかかわらず、それぞれ山嵐、うらなり、野だいこ、マドンナというあだ名で呼ばれ、また校長、教頭に至っては、本名すら明らかにならず、山嵐、うらなりと同様「おれ」によって狸、赤シャツというあだ名を付けられるのである。固有名を拒否し、あたかも名は体を表す、否、表さねばならぬとでもいうかのようなこのネーミング。つまり、彼らは固有名を剥ぎ取られ、それぞれの本質を代表するアレゴリカルな名——それはある抽象概念や類型を表す——へと変換されるのだ。

勿論、マドンナというあだ名は「おれ」がつけたものではない。しかし「おれ」は即座に「渾名の付いてる女にや昔から碌なもの

居」ないとして、「鬼神のお松」や「王妃のお百」という「怖い女」の「同類」(七)に変換してしまう。そもそも「おれ」の発話には人をすぐさま「く者」「く人」「く奴」などの類的呼称へと翻訳し、それを、さらに他の言葉(類義語)へ次々と変換していくという特徴がある。赤シャツは「ひどい奴」(七)「曲者」「わる者」「表と裏とは違った男」(八)「ハイカラ野郎の、ペテン師の、猫被りの、香具師の、モ、ンガアの、岡っ引きの、わん／＼鳴けば犬も同然な奴」(九)と翻訳され、うらなりは「愛すべき人」「君子」「聖人」(八)といった具合である。さらに生徒についてはあらゆる悪態語が使用され、「分らずや」「憐れな奴等」「いやにひねっこびた、植木撥の楓みた様な小人」「生意気な奴」「あきれ返った奴等」(三)「話せない雑兵」「腐った了見の奴等」「まるで豚」「鼻垂れ小僧」「けちな奴等」(四)などと規定、変換される。これらが、ある個人の特徴を分析(細分化)、記述したのではなく、あくまでも「く者」というある類型概念へと置き換え当てはめる行為であることには留意すべきであろう。「おれ」は分析などという近代的思想・論理とは相容れない人物なのである。

こうした類的志向／思考をもつ「おれ」が、個々の登場人物たちの固有名を剥ぎ取ることで、物語の寓意性はさらに強まり、それ自体とは別の物語、文脈が示唆される。それは、個ではなく、普遍的な価値・意味が実体的に存在するとし、それを物語化したアレゴリー的小説に顕著な特質にほかならない。事実、そのアレゴリー性によっ

て、この小説の登場人物は必然的にある概念を代表する傀儡的人物に見えてしまう。それについて、伊藤整は「自然主義文学の確立した実証的人間像の近代性」に比して「肉体的実証性を欠いている」と指摘しているが、そうした「肉体的実証性」を有した自然主義文学の人物たちが、ごく自然なこととして固有名で呼ばれているの言うまでもない。決して特別ではないそうした平凡な固有名を持つ個人、風景、出来事によって構成される小説は、近代において初めて可能となったものであるが、それはある個人をできるだけ現実的に即して描き取ること、むしろ我々人間の普遍的な姿を象徴するものとして、〈真実性〉という価値を持つ。まさに、普遍に通じるリズムが重視され、かつそれが自明視されるのである。そこでは、逆に固有名単独性（交換不可能性）は結局普遍という類に還元される。それを小説の近代性と呼ぶならば、『坊っちゃん』はまさに〈近代〉に反した小説であり、むしろ固有名を問題化することで、逆説的に〈名〉とは何かという問題に固執しているといえるだろう。実際、「おれ」は「坊っちゃん」という類型を指示する名でしか呼ばれない。それは、師範学校との乱闘事件が新聞に報道された際、山嵐が「堀田某」と、その姓が明記されているのに対して、「近頃東京から赴任した生意気なる某」（十）と、彼の名がなぜか秘されていることに端的に表れている。他の登場人物から固有名を剥ぎ取る「おれ」自身が、実は固有名を剥ぎ取られている存在なのである。このようなアレゴリカルな人物造型は、明らかに読者の自然な感

情移入を妨げる。我々は、自然主義文学等の固有名で描かれたリアリズム小説の場合とは異なり、坊っちゃんの体験を我が事のように追体験し、同一化することができない。何しろ、読者もまた「おれ」の「単純や真率」（五）を温かく笑うのであるから。読者は、「自分のことのように」感じることなく、「おれ」や山嵐の巻き起こす事件から距離を取ったまま楽しむ。それは「写生文家の人事に対する態度」とは「大人が子供を視るの態度」であり、「写生文家は泣かずに他の泣くを叙するものである」とし、「傍から見ても毒に耐えぬ裏に微笑を包む同情」を持つ（夏目漱石「写生文」明治四十年一月）という、まさに写生的な態度と言えるのではないか。だからこそ、「おれ」は「坊っちゃん」という子供であり続けるのだ。また写生文という点から言えば、通常この小説の主人公と考えられている「おれ」が、なぜかそのプロットの進展に関わっていないことも重要である。有光隆司が指摘しているように、そもそも「遠山家の令嬢を中心に、教頭、古賀、堀田らの間で次第にその輪が広がり、鮮明化されてゆく一つの根本的な「大事件」は、じつは男の存在如何にかかわりなく、彼の赴任以前からすでに始動していたものであって、しかも、一見賑やかに立ちまわる男の行動は、「大事件」そのものの内実とはなんら抵触し得ない。つまり、赤シャツたちによって排斥されようとしているのはうらなりと山嵐なのであり、実際の物語において「おれ」は単なる脇役に過ぎず、肝心の敵から「勇み肌坊っちゃんだから愛嬌がある」（十一）などと本気

では相手にされていないのである。また当の「おれ」自身も、赤シャツと芸者との密会を取り押さえ、天誅を加えるという計略を練ったものの、成果が見られないうちに「いやになつて」(十一)しまつており、実際の行動において当事者意識を持ち得ていない。つまり、「おれ」はこの作品のプロットの中心からは外れた存在なのであり、極言すれば「おれ」とは、主人公ではなく作品の筋を構成する物語を外部から観察し、我々に語る写生文的レポーター／ナレーターであると言えよう。

それは、本来なら物語の中心的な役割を担うはずのうらなりやマドンナの描写が、「おれ」の視点で語られるために大きく制限を受け、その実体がほとんど見えないうちに如実に表れている。うらなりは繊弱で遠慮がちな大人しい人物と捉えられているが、しかし、送別会の場面で「うらなり君はどこ迄人が好いんだか、殆んど底が知れない」(九)とあるように、その温厚さは「おれ」にとってほとんど「底が知れない」レベルにある。「おれ」がうらなりの「底」||内面を少しも捉え得ないため、読者は悲劇の主人公であるはずのうらなりの内実をほとんど知ることができず、ただ、停車場でマドンナと赤シャツを見かけた際の「躊躇の体」(七)に一瞬、その内面がほの見えるという程度なのである。さらに、通常の小説ならば当然精細に書き込まれるべきマドンナの描写は、レポーター／ナレーターとしてはかなり偏った「おれ」の視点で語られるために大きく制限を受け、たった一箇所の記述のみに留まらざるを得ない。その

描写とは「色の白い、ハイカラ頭の、脊の高い美人」(七)という単なる外形に留まる極めてシンプルなもので、ここからはプロットに関わるマドンナの内面などというものは、推察しようもない。しかもマドンナは「ちつとも見返らないで杖の上へ顔をのせて、正面ばかり眺めて居る」(同)のであり、「おれ」はその表情を読むことさえできないという徹底ぶりである。つまり、「おれ」はこの物語の女主人公から——ひいては物語自身から——徹底的に遠ざけられているのだ。その在り方は、『三四郎』における三四郎の位置にも近いが、まだしも三四郎は美禰子という〈他者〉の不可解性に出会い、変容していくことで、物語の登場人物となり得ていた。しかし一方、「おれ」はマドンナという〈他者〉とは決して出会えない。出会いが回避されているというよりも、そもそもそうした近代的我を持った(固有名を有した)「個人」としては造型されていないのである。そうした、「おれ」が物語に参与できないというこの小説の暗黙の規則のため、物語の本筋は、下宿の婆さんからの噂話として——うらなり・マドンナ・赤シャツとの三角関係(七)、うらなり転任の真相(八)——提示されることになる。これは小説としてはかなり特異なあり方と言えよう。このように、「おれ」が本来的に物語から疎外されているとすれば、一体そこには何が現れているのか。

三、「坊っちゃん」の暴くもの

先述したように、「おれ」の異質性はその「無鉄砲」を語るエピソードと田舎への差別的言辭によって強調されるが、しかしそもそも我々が「おれ」に驚くのは、その恐るべき「単純さ」故ではないだろうか。それは単なる「無鉄砲」という性格レベルに還元できるものではなく、ある固有性を顕在化させていると思われる。というのも、「おれ」はより根源的な〈言葉〉の問題に関わる、生々しい出来事を語ることによって、寓話に回収されえない〈単独性〉を指し示しているのである。そのことは、やはり冒頭の幼少時のエピソードに現れている。

そもそも、「おれ」が二階から飛び降りて腰をぬかすような「無鉄砲」な行動に出たのは、同級生が「冗談」で「いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したから」であった。つまり、「おれ」は「飛び降りろ」という冗談を冗談として受け取らず、あくまでも字義通りに実践したのであり、ここに「おれ」の持つ言葉に対するある頑迷さを指摘することができる。友だちの一人が「そんなら君の指を切つてみると注文したから」切つただめだという西洋ナイフでの自傷の一件も、また同様である。それは成長した後も変わらず、蔑視する宿屋の下女に笑われてしまったのも、「東京はよい所で御座いませうと云つたから当り前だと答へ」(二) ため、つまり、単なる社交辞令を真に受け、不適切な応答をしてしまったことによるのである。こうした冗談や社交辞令とい

う、その言葉自体とは異なる機能を持つ言語行為は、通常ならば誤解されることはない。しかし、「おれ」はあくまでもその言葉を字義通りに受け取るのだ。狸の単なる形式的な「教育の精神」についての訓戒を真に受け、「到底あなたの仰やる通りにや、出来ません、此辞令は返しますと云」う「おれ」に対し、「校長は狸の様な眼をばちつかせて」「今のは只希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいゝと云ひながら笑つた」(二) というように、それは通常のコミュニケーションにおいては違犯とされる、極めて特異なものであるといえよう。そのような「おれ」の行為は、小森陽一の指摘するように、「他者の言葉に裏表はないと信じ、その言葉を即自分の行為や思考として引き受けていくという、他律的な行動様式」³³ であると言える。ただし、それは小森の言う社会的な「〈公〉の言語」(建前の論理) と個人的な「〈私〉の生活との使い分け、即ち「〈公〉と〈私〉という二重性についての無知」という問題に収斂されるものではない。我々は、「おれ」の奇妙な言葉へのこだわり、言葉とその意味内容(物)との一致を求める頑迷さによって、むしろ記号表現と記号内容とのズレが問題化され、その恣意性が暴かれるという事態に立ち会うのである。

「大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云ふと、一番左の方に居た、顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「笹梅め、イナゴもバツタも同じもんだ。」(四)

あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物ぢやありません、伊万里ですと云った。伊万里だつて瀬戸物ぢやないかと、云つたら、博物はえへゝゝと笑つて居た。あとで聞いて見たら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云ふのださうだ。おれは江戸っ子だから、陶器の事を瀬戸物といふのかと思つて居た。(九)

これらは、一つの物／意味内容(虫)が、二つの名(バッタとイナゴ)で呼ばれること、また逆に、一つの名(瀬戸物)が二つの物／意味内容(陶磁器一般とその一ジャンルとしての瀬戸焼)を持つということをやモア化した事例である。つまり、一般に自明視されている言葉と意味との一対一の関係がゆらぎ、その複数性、ずれが顕在化されているのである。こうした言語の複数性は、無論「おれ」とこの「四国辺」の人間との言語規則との差異によって生じたものだが、「おれ」はそうした言葉と意味とのずれを忠実に書き留める。ここでは「山城屋とは質屋の勘太郎の屋号」(二)ではなく宿屋の名前であり(一つの名に二つの物)、男(赤シャツ)が「女の様な優しい声」(二)を出し、蕎麦屋は「東京」と謳っておきながら「滅法きたな」(三)く、「軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事」(五)である。こうした言葉の複数性や指示内容とのずれに對する鋭敏さは、「おれ」の語りを基礎づけるものであると言える。先述した社交辞令や冗談も、一つの言語行為に對する意味とは異なる別の機能を持たせるといふ点で、一種の複数化と考えられる。

『坊っちゃん』における〈名〉

要するに、この「おれ」の語りにおいては、一貫してコミュニケーションの場における言語の不透明性が問題化されているのである。その意味では、物語とすれ違つてしまふ「おれ」は、より根底的なレベルでのいわば〈言語という他者〉に出会つていると言えよう。それは、単に地域差(方言)によつてのみ生じるものではない。「おれ」は東京からの「渡りもの」(八)赤シャツと野だいこによつて山嵐が生徒たちを煽動したという「推察できる謎」(六) Ⅱほのめかしを真に受け、山嵐を糾そうとする。しかし、それは後に「明言した覚えはない」(同)と言ひ逃れられてしまふような、事後的に意味内容を不明瞭化できるような言語行為であり、まさに、意味とは字義通りにあるのではなく、現実の他者とのコミュニケーションの場において確定される、あるいはゆらぐものであるということを示唆するのである。

こうした不透明性は、その受け手が不特定多数であり、メディアを介したものである場合、即ち新聞というマスコミュニケーションの場においては、より増幅される。先述したように、中学校と師範学校との乱闘事件において、単に巻き込まれただけの「おれ」と山嵐が主犯として報道されてしまふのだが、「新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がない」(十一)と狸が言うように、その「かかれた事」Ⅱ言葉は、いくら真相と違つていても、後で「取消が出」(同)ようと、それ自身によつて実定性を持ち、機能(流通)

してしまうのを止めることはできない。それは、言葉の発信者（新聞屋）においても同じである。言葉は決して一義的に操作可能なものではないのだ。勿論、こうした言語の持つ不透明性を、「おれ」は許すことができない。「君子と云ふ言葉を書物の上で知ってるが、是は字引にある許で、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢張り正体のある文字だと感心した位だ」（六）という「おれ」は、まさに「文字」に「正体」を求めずにはいられないのである。彼は「きまつた所へ出ると、急に溜飲が起つて、咽喉の所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ない」という「妙な病氣」（九）を持っているが、それは「おれ」の望む、言葉と意味との完全な一致⇨自らの言葉が自らの真意を代表し、それがそのまま他者へ伝達されるという言語行為が、現実の他者とのコミュニケーションの場においては不可能であることを示唆していると言えよう。一方、職員会議で「おれ」にとつて「言語はあるが意味がない」（六）空疎な言葉をもてあそぶ野だや赤シャツたちの言語行為は、「《言語》としての意味を空無化しながら一定の〈場〉にだけ機能する任意の意味をもてあそぶ」ものであり、そのような「コトバが本来の字義的な意味を離れて機能的な意味に従うとき、コトバはむしろ記号としての属性である恣意性をあらわにする」⁽⁴⁾。これは「文字」に「正体」を、即ち言葉と意味との一致を求める「おれ」が最も恐れる事態にはかならず、そこにまた言語という他者の不可解性が喚起されると言えよう。

しかし、それは決して他我⇨他者の内面の不可解性という主題へと結実することはない。確かに、「おれ」は赤シャツを「親切」か「ひどい奴」か決めかね、マドンナを「余つ程気の知れないおきやん」（七）と言うが、そのような分らないものはそれ自体として考えられることなく、悪玉か善玉かという二者択一の問題に単純化される。勿論、「世の中」を「物騒に思ひ出し」、「別段際だつた大事件にも出逢はないのに、もう五つ六つ年を取つた様な気がする」という述懐に、「おれ」の成長を見ることもできるかもしれない。しかし、それは「どつちが悪る者だか判然しない」（同）という問題を「人間は好き嫌で働くものだ。論法で働くものぢやない」（九）という論理によって解決するやいなや、片付けられてしまうのだ。そもそも先述したように、固有名を剥ぎ取りあだ名をつける「おれ」は、全てを個ではなく類へと変換⇨翻訳してしまう志向を有していたが、そうした「おれ」の類への変換は、物語の表層から個々の人物の相貌、固有の内面を切り落とし、アレゴリカルな物語空間を召喚するものであった。そこでは、一見現実の他者は消え去るように見える。しかし、「おれ」はこのような言語のレベルにおいてこそ〈他者〉に出会っていると断言するのはないか。不可解なのは、他者の内面ではない。内面を語る（再現⇨代行）べき言葉が、現実のコミュニケーションの場において機能する、その不透明性なのである。

四、〈起源〉としての清

それは、ほとんど唯一の固有名を持った存在である清との間に於いて夢想される関係性とは、対極にあるものと言える。「かうして遠くへ来て迄、清の身の上を案じてゐてやりさへすれば、おれの真心まごころは通じるに違ない。通じさへすれば手紙なんぞやる必要はない」(十)。ここには、言葉という不透明なものを排することによる、より濃密な無媒介的な関係が夢想されている。「片破れ」(六)とも呼ばれているように、「おれ」が「何と云つても賞めてくれる」清は〈他者〉ではないのだ。しかし、現実には、清は手紙を欲しがっており、そもそも前の手紙は「奮発して長いのを書いてやつた」(二)という「おれ」の認識とは逆に、清が「あまり短過ぎて、容子がよくわからない」(七)と訴えていたことを忘れてはならない。さらに、そもそも幼少時の「おれ」は清に対し「自分の力でおれを製造して誇つてる様に見える。少々気味がわるかつた」(一)というように、「不審」と違和を感じていたはずではなかつたか。そうした清の〈他者性〉は、現実の清から離れ、距離を持つことで神聖化されていく過程で隠蔽される。「教育もない身分もない婆さんだが、人間としては頗る尊とい。今迄はあんなに世話になつて別段難有いとも思はなかつたが、かうして、一人で遠国へ来て見ると、始めてあの親切がわかる」(四)という言葉に端的に表れているように、共に暮らしているときには感じられていなかったものが、四国での生活のうちに「美しい心」(六)として発見されていく。ついには

『坊っちゃん』における〈名〉

「清は矢張り善人だ。あんな氣立のいゝ女は日本中さがして歩いたつて滅多にはない」(七)、「早く東京へ帰つて清と一所になるに限る」(十)とまで、美化されるに至り、清は「おれ」にとつて欠くべからざる存在となる。換言すれば、清という固有名は、次第に「尊」「美」「善」という抽象観念へと変換され、超越化されるのだ。その意味では、清とは、「單純や眞率」という彼のアイデンティティを支えるために、事後的に見出された「おれ」の幻想まぼろしにすぎないのである。事実、「おれ」を保証しているはずの清は、「おれ」が「麴町」や「麻布」といった山の手やまのてに「ぶらんこ」「西洋間」を備えた「玄關のある家」(一)を建て、そこに一緒に住むことを夢見ている、即ち「おれ」の立身出世を信じている、現世的な欲望を持った女性であつたはずだ⑤。したがつて、清という固有名をそのままに、その意味内容(実体)を変換させるといふ「おれ」の行為は、そうした清の現実性を剥ぎ取る行為でもあると言えよう。

しかし、「おれ」によって超越化される清自身、そもそもこのような「おれ」の名付け行為の初源において深く関わっていたのではなかつたか。

浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるのかと清に聞いて見たら、さうぢやありません、あの人はうらなりの唐茄子許食かきべるから、蒼くふくれるんですと教へて呉れた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬かみだと思ふ。此英語の教師もうらなり許り食つてるに違ない。尤も

うらなりとは何の事か今以て知らない。清に聞いて見た事はあ
るが、清は笑つて答へなかつた。大方清も知らないんだらう。

(一)

このように、古賀―「顔の蒼くふくれた人」―「うらなりの唐茄子」という類推による結びつき、「うらなり」というあだ名の起源は清にある。それは、類型へと翻訳することで、言葉自体にはその指示内容(人)との必然的な結びつきを有していない固有名よりも、より物(人)に似ることを志向するものである。(赤シャツ、野だいこ、狸等も同様である)。しかし、ここでその類推の帰着点「うらなり」が、実は「おれ」の、そして清も「知らない」ものであるとされていることには注意してよい。「うらなり」とは「延びたつるの末すゑになった実」であり、「栄養がゆきとどかず青白いかぼちゃを、元氣のない人にとえたもの」⁽¹⁰⁾、つまり本来の意味としても古賀を代表させるに適切な言葉であつたと言えるが、しかしその実体を知らないままで使用するのは、「おれ」らしからぬ行為ではないか。それは、「おれ」の忌避する物⇨実体と結びついていない記号としての言葉の使用にほかならない。にもかかわらず、頑迷に言葉と実体との結びつきを求める「おれ」がその恣意性に鈍感でいられるのは、それが他ならぬ清という超越化された存在によって保証されているからであらう。故に、清が知らないらしいという事実をもつてしても、それは揺らぐことはない。清はそれ以上遡ることのない、「おれ」の言葉の起源であるのだ。思えば、「おれ」の「好き嫌」と

いう論法も、実は「自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌なひとは屹度落ち振れるものと信じて居る」(一)清のものであり、その意味では「おれ」は〈起源としての清〉に忠実に生きることを選択したのである。またさらに言えば、そもそも清こそ、「おれ」から固有名を剥ぎ取り「坊っちゃん」と名付けていたのではなかつたか。清はいわば「おれ」の名付けの親⇨祖おやなのだ。事実、語り手の「おれ」は、固有名を棄て、清の付けた名「坊っちゃん」を選びとることで、その類的志向を忠実に模倣し、人々の固有名を剥ぎ取っていく。この清という起源によって、この「おれ」の回想(手記)は、アレゴリカルな世界を現出させているのである。

したがって、その意味では「坊っちゃん」は永遠に「成長しない子供」⁽¹¹⁾であり、逆説的には最早死んでいると言ってもよい。それは、清が死ぬことによって、むしろ永遠化されることと呼応している。

死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんの小来るのを楽しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。(十一)

清という超越的な母⇨起源の待つ「小日向の養源寺」とは、固有名で名指されるところの現実の場所ではなく、むしろ彼岸の世界―「おれ」を日向のような暖かさで養う源―を指すのかもしれない。

〔注〕

- (1) 江藤淳「新潮文庫『坊っちゃん』解説」(一九八〇年五月、新潮社)
- (2) 片岡豊「〈没主体〉の悲劇―『坊っちゃん』論―」(立教大学日本文学、一九七七年二月)
- (3) 小森陽一「矛盾としての『坊っちゃん』」(漱石研究、一九九九年一〇月)
- (4) 浅野洋「笑われた男―『坊っちゃん』管見―」(立教大学日本文学、一九八六年二月)
- (5) 石井和夫「貴種流離譚のパロディ―『坊っちゃん』差別する漱石―」(敍説、一九九〇年一月)
- (6) 平岡敏夫「『坊っちゃん』試論―小日向の養源寺―」(文学、一九七一年一月)
- (7) 小谷野敦「『坊っちゃん』の系譜学―江戸っ子・公平・維新―」(夏目漱石を江戸から読む、一九九五年三月、中央公論)
- (8) 生方智子「国民文学としての『坊っちゃん』」(漱石研究、一九九七年一月)
- (9) 「アレゴリー」『最新文学批評用語辞典』(一九九八年八月、研究社出版)。その他、P・ド・マン「時間性の修辞学」(アレゴリーとシンボル)〔批評空間〕一九九一年四月)を参照。
- (10) 伊藤整「夏目漱石」(現代日本小説体系、一六卷、一九四九年五月、河出書房)
- (11) 柄谷行人「大江健三郎のアレゴリー」(『終焉をめぐる』一九九〇年五月、福武書店)は、「近代リアリズム(ノミナリズム)は、固有名を利用しながら、本当は固有名を抑圧するものである」とし、逆に、カフカのようにきわめて写実的でありながら固有名を欠く小説

は「寓話のようになる」が、「それは固有名の排除ではなくて、固有名が与えている錯覚の排除であり、それは逆に固有名へのこだわりである」と看破する。

- (12) 有光隆司「『坊っちゃん』の構造―悲劇の方法について―」(国語と国文学、一九八二年八月)
- (13) 小森陽一「『坊っちゃん』の〈語り〉の構造―裏表のある言葉―」(日本文学、一九八三年三月、四月)
- (14) 浅野洋前掲論文(4)
- (15) 北川扶生子「『坊っちゃん』における清の意味―〈片破れ〉という関係―」(国文学研究ノート、一九九四年三月)
- (16) 石原千秋「『坊っちゃん』の山の手」(文学、一九八六年八月)
- (17) 松村昌家・相原和邦「坊っちゃん注解」(漱石全集、第二卷、一九九四年一月、岩波書店)
- (18) 関谷由美子「天皇の国の貴公子―『坊っちゃん』の〈声〉」(解釈と鑑賞、二〇〇五年六月)

*本文の引用は『漱石全集』第二卷(一九九四年一月、岩波書店)に拠る。